

有限会社平田観光農園

※2018年3月現在

代表者名	平田 真一	資本金	10 百万円
設立年	1985 年 8 月 1 日	売上高	145 百万円 (2017 年 5 月期)
事業内容	生産 (イチゴ、ブドウ、リンゴ)、消費者直売、加工・製造、観光・交流、飲食	経営規模	畑 55ha、樹園地 833.7ha、加工施設 253.7㎡ (ドライフルーツ)、直売所 219㎡ (約 70 種類)
従事者数	25 人 (うち女性 13 人。女性内訳：一般職 6 人、常勤パート 7 人)		
女性活躍支援	[女性に配慮して取組んだ環境整備] 施設設備関係 (休憩室・屋内・野外トイレ)		



経営概況

有限会社平田観光農園は、会長の平田克明氏の両親が1955年に始めた1haの観光リンゴ園を起源とする。両親は地域農家の組合でブドウの栽培も手がけるが、1984年に高齢化によりブドウ栽培を打ち切ることになった。一方、克明氏は地元を離れて国の農業試験場に勤務し、長野県における巨峰の産地化など業績を残していた。しかし、故郷からブドウ園が消えることを惜しみ退職して同社を設立、観光ブドウ園を開くこととなった。

翌年から果樹の栽培品目を増やし（現在14種150品目、樹園地833ha）、イチゴの施設栽培を始めたほか、1991年に果実の加工組合を設

立。これにより、通年雇用の経営体制を築いた。観光農園内にはショップ、カフェレストラン、体験施設を併設し、年間来園者は20万人。また、2008年には長野県にドライフルーツ加工会社を設立し、2015年に長野駅構内には直売店を出店するなど、グループ会社は5社に及ぶ。売上金額のおおよその内訳は、果実販売が5割、飲食と体験が2割ずつ、加工が1割となっている。

かたわら克明氏は地域活性にも心を砕き、2016年に生活インフラを支える地域マネジメント会社を設立。廃校を活用した体験交流施設も運営し、地区の人口を維持しているという。

1. 経営者の理念・意識改革

社訓は「忠恕」(真心と思いやりの心)。経営理念は「自然の語らいとともに、四季を通じお客様へ信頼の味をお届けし、夢のある新しい農業を目指す」とする。同社はブドウ園の観光化でスタートしたが、観光化には「農家の収益率を上げる」という明確な意図があったという。モノを売るのではなく、コト=体験や加工品を売ることによって収益率を大幅に上げ、夢のある農業を追い求めてきた



のだ。

社員の位置づけにも理念がある。広く有能な人材を求め、農業経営者として育て独立させることを社是としている。そのため、男女の別なく社員ひとりひとりが、生産から販売、体験サービス、企画や経理事務まであらゆる業務を経験する。これまでに6組が社内結婚して独立。子会社の経営を任されている例もあれば、他県でイチゴやメロン栽培を始めた例もあるという。

なお、現社長は克明氏の長男の真一氏だが、常務取締役は社員から育てられた他県出身の人材で、長野県のドライフルーツの子会社社長を兼任している。

2. 女性の採用と登用

すべての社員があらゆる業務を経験する「農業経営者塾」のような同社において、仕事の分野に男女の別はない。しかし結果として、女性が男性よりも抜きんでて能力を発揮する分野が多いという。その分野は観光農園としての同社のブランドデザインを形成するもので、商品開発の企画、セールスプロモーションには女性社員を積極的に登用している。

農園内でも、案内や販売、体験などの接客において、柔らかな物腰や丁寧な話し方、安全や快適さの目配りなどにおいて、女性社員が活躍しているという。園内の案内ボード、日々更新される情報のポップなどは女性社員の手作りで、可愛いイラストを添えるなど女性の感性が光っている。カフェのメニューや体験プログラムも、女性客や親子連れの客と目線が近い女性社員のアイデアが採用されることが多いという。

ブランドデザインをさらに磨くため、同社では2015年にデザイン部を設け社員を募集。結果として女性が採用された。HP、チラシやパンフレット、季節の通信など印刷物のデザインはこの社

員が中心となって担い、客からは「雰囲気がよくなった」と好評だという。

3. 女性が働きやすい環境の整備

産前産後休業、育児休業などの制度があるが、これまでに利用した社員はいない。というのは、これまで結婚した社員は退社し独立しているため、現在の一般職の社員は男女ともにすべて独身だという。

設備面では、女性用更衣室、休憩室、男女別洗浄機つきトイレ（屋内、野外）などが整備されている。また中山間地の農園は冬には積雪もあり、冬季は農園近くにアパートを借り上げ、雪道の自動車運転の経験がない女性社員が利用できるようにしている。

生産部門では、扱いやすい電動式農機具の導入を進めている。落ち葉掃きなどに使用するブロアーは、燃油を使うエンジン式のものから電気バッテリー式に切り替え、果樹の剪定はさみも電動式にし、握力が小さくても作業効率を上げられるよう改善した。こうした改善は生産現場の安全性を高め、より働きやすい職場づくりにつながっている。

審査委員の声

農学部出身で国の農業試験場で研究を続けてきた平田克明会長の果樹に関する豊富な知見が、14種150品目という豊富な商品群などに活かされている。また、女性を含めた若い才能を見出し、地域農業の担い手育成に力を入れていることも特筆される。息子の真一社長の現代的なビジネスセンスを背景に、特に販売、加工部門では芸術大卒のデザイナーを含め女性の感性が全面的に発揮されている。観光農園のため施設建物が充実しており、女性の働きやすさも明らかだ。